

国語 問題

□ つぎの文章は長谷川宏著『高校生のための哲学入門』の第三章「社会の目」の抜粋(文章を一部改変した)である。これを讀んで、後の問いに答えなさい。

「社会の目」というときの目は、個人のもつ目とはなにかしらちがっている。社会の目といういいかたがなりたつのは、わたしたちが社会から見られているという意識をもつからだ。社会から見られていると感じるときは、特定の個人がわたしを見るよきの目とはちがう。特定の個人を超えた、その向こうにある、不特定多数の人の目、それが社会の目だ。

社会の目をどう受けとめ、それにどう対応していくのか。ここではこまかな差異は無視して、大きく二つに類別して考えてみたい。社会の目に従って生きる生きかたと、抗って生きる生きかたの二つだ。

社会の目に従って生きていくとするのは、いうならば優等生的な生きかたである。盛り場では賑やかに陽気にお祭り気分を時を過すのが優等生的な生きかただし、学校の授業では教師の説明に耳を傾けて内容の理解に努めることが、アルバイト先では割り当てられた仕事を精出してこなすのが、優等生的な生きかただ。アギユクツさのともなう生きかたであるのはいうまでもないが、近代以前の社会では一般的にこういう生きかたがよしとされたし、近代以降も日本ではこういう生きかたをよしとする声があつて小さくない。Aに入ればAに従え」といったことわざや「和を大切にす」といった処世法がそれなりに説得力をもつのが、日本の近代社会なのだ。

個人の生きかたよりも社会の目や社会の秩序が圧倒的に重視される前近代にあつては、個人の生きかたの指針は個人の外から個人のもとへとやつてきた。自分の欲望や意志や周囲への不満を抑えて、外からやってくる規範を素直に受け入れて生きる人が、立派な人格者だつた。そうした生きかたは、「礼」を重んじる生きかた、「世間体」を重んじる生きかたとして、ことさらにイゲンシヨウされた。たとえば、江戸時代に広く行きわたつた儒教道徳は、そうしたタリツ的な生きかたこそが善だと教えるものだつた。

近代の個人主義思想は、それへの反動として、外からやってくる規範に強く反発し、社会の目に抗って生きることを自分が自由で自立した生きかただと考える。ことに前近代と近代がはげしくせめぎあう過渡期にあつては、外からやつてきて個人の自由を押さえこもうとする社会の目は、B的な目、退嬰的な目、反近代的な目として反発され、拒否された。社会の目に抗って生きることが、そのまま自由に生きることだと考えられた。前近代と近代が真つ向からぶつかりあい、社会の目が古き前近代を体現するものと見なされるかぎり、近代的な新しさを求める自由な個人が、社会の目に強く反発したとしても不思議ではなかつた。古い秩序や規範意識や価値意識を捨てて、未知の新しい世界に身を投じようとするのが、自由を手にした個人の基本的な姿勢だつた。

だが、古い秩序を否定し拒否するだけでは自由な生きかたは実現しない。古きもの、遅れたものを否定し拒否するとき、未知の新しさへと向かう自由が実感されるのはたしかだが、その自由は否定の色合いが強すぎて、新しい生き方を生み出す積極的な内容を欠いている。自由を求める個人は、社会の目に抗いつつ、自分にふさわしい具体的な生き方をどう構築したらいいのか。

社会の目に抗いつつ、抗つたその生きかたに具体的な内容を盛りこむには、社会の目にきちんと向き合うほかはない。それは、社会の目に素直に従うのとはちがう。抗う姿勢を保ちつつ、社会の目に背を向けるのではなく、それと正面から向き合うのだ。そのとき、社会の目は、単純に否定し去ることなどできないことが見えてくる。

現代の都市生活は、かつての町や村の生活にくらべると、その日々は格段に変化に富み、また変化が求められてもいるけれども、暮らしの根底にある人々の思いは、一日一日をつつがなく過したいという思いだ。平穩無事の毎日を願う気持ち根底にあつて、その上でさまざまな変化を求めるのだ。そして、人びとの暮らしのなかからうまれる社会の目も、その根底にあるのは、一日一日がつつがなく過ぎていつてほしいという思いだ。もう少し積極的によえば、それは日々の暮らしを維持していかうとする目だ。変化を受けいれつつ安らかに日々を重ねていきたいと思う目だ。その目は、同じ時代を生きる多くの人に

国語 問題

共有されているだけでなく、時代から時代へと多くの人々に受け継がれてきた目でもある。となれば、その目は空間的な広がりや時間的な奥行きを備えているといつてよい。

それは、社会の「しきたり」とか世の「ならい」とかいわれるものにも受け継がれている。「しきたり」は、動詞「しきたる(仕来る)」の C 形が名詞となったもので、「ずっとそうやってきたこと」を意味するし、「ならい」は動詞「ならう(習う)」の C 形で、「くりかえし経験したこと」を意味する。どちらも、古い過去から現在へと続く時間の流れを意識したことばで、長きにわたる経験を大切に思う人びとの生活感覚がそこにこめられている。むしろ、「しきたり」や「ならい」はただ続いてきたのではなく、さまざまに変化し、存亡の危機にも見舞われ、実際に消滅したのも少なくないなかで、なおいまに受け継がれたものなのである。

社会の目についても同じことがいえる。それは時代とともに変化しつつ、消滅した部分や、あらたに付け加わった部分をふくんでいまに受け継がれたものだ。社会の目に抗いつつもきちんと向き合う必要があるのは、そこにこめられた変化と持続のこの歴史性のゆえだ。そこには、過去の人びとの数限りない共同の経験がいわば観念の結晶として――生きる知恵として――ふくまれているので、それと向き合うことは、結果としてそれを強く否定することになるとしても、こちらのもの見かたやふるまいかたに歴史的な厚みと重みをあたえずにはいけない。そういうふうな社会の目と向き合うことは、人びとの穏やかな暮らしのもつ共同の広がりや歴史的な奥行きへと触手を伸ばすことだ。そして、そうした試みを通じて、見られるこちら側の言動に、共同の広がりや歴史的な奥行きがなほどこか付け加わるのである。

問一 傍線部ア～ウのカタカナを漢字に直して書きなさい。(大きな字で丁寧に書くこと)

問二 空欄 A に入る適切な漢字一字を書きなさい。

問三 空欄 B に入る最も適切な語をつぎの中から選び、記号で答えなさい。

ア 隸属 イ 専制 ウ 退廃 エ 封建 オ 任侠

問四 (1) 空欄 C に入る活用形を書きなさい。

(2) 「しきたり」「ならい」と同様、動詞の活用形が名詞に転化した他の言葉の例を一つ考え、書きなさい。

問五 傍線部「社会の目は、単純に否定し去ることなどできない」とあるが、その理由を五十字程度で説明しなさい。ただし、句読点や記号も一字と教える。

国語 問題

□ つぎの文章は平安時代の女流歌人である伊勢の逸話を記したものである。これを読んで後の問いに答えなさい。

昔、伊勢と聞こえし歌詠みの女、世の中過ぎわびて、都にも住みうかれななどして、世にふべきたづきもなく侍りけるが、うづまさに参りて、心をすましつづ、勤めなどして、

南無*薬師あはれみ給へ世の中ありわづらふも同じやまひぞ

と詠みて侍りければ、仏殿動き侍りけり。その夜の暁、夢に貴き僧のおはして、「汝が歌の、身にしてみても思し召さるれば、一世にありつゝべきほどのこと侍るべし。この暁、急ぎてまかりいでね。もし、道にて思はざること侍るとも、いなぶ心あるべからず」と見つ。あはれ、かたじけなきことに覺えて、まかり出でぬ。何となく苦しままに、ある古堂に人もなくて侍りけるに立ち入り、仏拜みなどするほどに、輿、馬乗りつれて、ゆゆしげなる人の通り侍りけるが、何とか思ひ侍りけん、この堂に入り侍れば、伊勢、すべき方なくて、後ろの方へ行き侍るに、この中の主と思しき僧の追ひ来て、「かやうのこと申すにつけて、はばかり侍れど、仏の御告げ侍りて申すになん。我が住む方さまをも御覽せられ侍れかし」と、ねんごろに聞こえ侍り。是を違へんこと、仏の思し召さんも恐ろしく覺え侍りけるままに、なびきにけり。ことに喜びて、輿に乗せて、*男山にともに至り侍りぬ。*八幡宮の検校にてぞ侍りける。いつきかしづくことかぎりなし。子どもあまた設けにければ、*わくかたなくわりなきものに思ひてぞ侍りける。この検校も、年ごろ、あひなれ侍りける妻に別れ、みめかたちあてやかに、心ざまのわりなからん人がなと思ひけるに、この伊勢をえてければ、心のままにぞ侍りける。

〔撰集抄〕より

注 *うづまさ

現在の京都市右京区の地名。「太秦」。ここは広隆寺に薬師如来が安置されていた。

*薬師

薬師如来のこと。病氣平癒のために祈願された。

*男山

現在の京都府八幡市にある山。ここに石清水八幡宮がある。

*八幡宮の検校

石清水八幡宮の職名。寺社の仕事の責任者。

*わくかたなくわりなきものに思ひて

ただ一途にいじらしい人と思つて。

問一 二重傍線部A「ふべきたづき」・B「まかりいでね」・C「えてければ」を品詞分解したとき、それぞれの品詞の並び順として正しいものをつぎの中からそれぞれ選び、記号で答えなさい(同じ記号をくりかえして選んでもかまわない)。

- | | | |
|-----------------|-----------------|-----------------|
| ア 動詞・名詞 | イ 動詞・助動詞 | ウ 動詞・助詞 |
| エ 動詞・助動詞・名詞 | オ 動詞・助動詞・助詞 | カ 動詞・助詞・助動詞 |
| キ 動詞・助動詞・助動詞・名詞 | ク 動詞・助動詞・助動詞・助詞 | ケ 動詞・助動詞・助詞・名詞 |
| コ 動詞・助動詞・助詞・助詞 | サ 動詞・助詞・動詞・助動詞 | シ 動詞・助動詞・動詞・助動詞 |
| ス 動詞・助動詞・動詞・助詞 | | |

問二 波線部①「思し召さ」・②「申す」・③「御覽せ」・④「喜び」の動作の主体として最も適切なものをつぎの中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。(同じ記号をくりかえして選んでもかまわない)

- | | | | | |
|------|------|-------|-------|------|
| ア 伊勢 | イ 薬師 | ウ 貴き僧 | エ 子ども | オ 検校 |
|------|------|-------|-------|------|

問三 傍線部1「世にありつゝべきほどのこと」とは具体的にどのようなことであったか。説明しなさい。

問四 傍線部2「みめかたちあてやかに、心さまのわりなからん人がなと思ひけるに」を現代語訳しなさい。

国語 問題

三 つぎの文章は、孔子の弟子である関子騫の幼少時の逸話を記したものである。これを読んで後の問いに答えなさい（設問の都合上、返り点や送り仮名を省略した箇所がある）。

関損字子騫、早喪^レ母。父娶^ニ後妻^一、生^ニ二子^一。損至孝^ニ不^レ怠。母疾^ニ惡^シ之^一、¹所生子以^{*}綿絮衣之、損以^ニ蘆花絮^一。父冬月²令損御車。体寒^ニ失^レ鞞。父責^レ之、損不^ニ自理^一。父察知^レ之、欲^レ遣^ニ後母^一。損泣^{キテ}啓^レ父曰、母在^一子寒、母去^ニ子^一。父善^レ之而止。母亦悔改[、]待^ニ三子^一平均[、]遂成^ニ慈母^一。

『蒙求』より。文章を一部改変した

注 *綿絮 綿入れの着物。

*蘆花絮 綿の代用として蘆（あし）の穂を用いた粗末な服。

*単 裏地のない粗末な服。

問一 傍線部1「所生子以綿絮衣之」の書き下し文は「生む所の子は綿絮を以て之に衣せ^キ」であるが、これに従って、解答欄の文に返り点をつけなさい。

問二 傍線部2「令損御車」のひらがなのみの書き下し文として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア おくるまをそんぜしむ
- イ おくるまをそんぜらる
- ウ せんをしてくるまをぎよせらる
- エ せんをしてくるまをぎよせしむ
- オ せんにめいじくるまをぎよせしむ
- カ せんにめいじくるまをぎよせらる

問三 傍線部3「母亦悔改」とあるが、なぜそうだったのか。説明しなさい。

四 つぎのA～ウのテーマから一つを選び、あなたの考えを述べなさい。ただし、理由や根拠も挙げて書くこと。

- A 最近気になった言葉遣いについて
- イ 最近気になった文学的事象（傾向や流行）について
- ウ 国語教育において古典文学の一節を暗唱させることの是非について